

随感 千里山会四十年に想う

十四回生 柿崎眞吾

一九七〇年十月一日、「千二校同窓生の集い」の発起人会から今年満四十年の総会を迎えました。発起人は7名、故人が5名、長期療養が1名、健在で今日ただ一人ご出席の方(三分二元監事)が1名です。

今日は二つのことについてお話ししたいと思います。それは千里山会が今日在るのは、二人の人と、もう二人の人(法人)に極めて重要な関わりを持っているからです。

冒頭の「千二校同窓生の集い」では14田中博氏がこの旗揚げの一番の働き手であったかと思えます。ユ一モア溢れる一枚の案内状は貴重と申せましょう。人形町のお寿司屋さんの養子から一部上場まで駆け上がった彼でも、本懐を遂げてのあとに来た日本経済の放物曲線には勝てず、社名はそのまま残して去りました。しかしその全盛期にもう一度会のために大働きをして

くれたのは後述します。

この四十年前の千二同窓生の情報集めをコツコツしていた人がいました。これなしでは当時超オイソガ氏の田中氏では手も足も出ません。そこで一人の役者が登場します。12福山博寿様です。芸名は象三、生粋の南国奄美大島の顔つき目つきにダミ声とくれば、与えられる役柄はどうしても悪役偏重になり、一度だけ好々爺の役を観たときはホッとしたものです。豪放に見えても役者ですから繊細な人でした。

四半世紀が経って九十四年の早春でした。電話で呼び出され二年後輩ですから「はい！」と応えて渋谷で落ち合うことになりました。

「久しぶりに千二の東京の同窓会やたら思うてんねん。前やったんは二十年以上昔やさかい、君事務的なことやってくれへんか？ここにその時の名簿あるけど今どうなってるや判れへん・・・場所は任しといて(それは池袋の小さな芝居の練習小屋でした)」ややこしい場所です、どしや降りの中、男女三十三名の方々が来会、沸騰するような雰囲気の中で時を忘れて語り合い、小学唱歌の大合唱でお開き、来年の再会を誓って散会しました。四十年前の旗揚げの時と、この

復活第一回の両方に出席されて、今日もご出席のお宝のような五人の方がこの席に居られます。

9 飯島泰蔵様、10 三谷(平井)万里子様、12 石川忠志様、14 三分一克美様、16 清水健至様、五人のお方です。ちよつとお立ち願えませんか。(拍手)

ありがとうございます！

話は戻って翌九十五年のこと、再会を誓ったのに夏が来ても福山さんから音沙汰なく、やつと連絡がとれたら「市川染五郎(当時)主演のアマデュウスにコック役で出るさかい秋は全国回るからよろしゅう頼むわ」との声を聞き、ハタと思案の挙句、そこは同期の誼を頼って旗揚げの時の立役者田中博氏を訪ねたところ、

「よつしや、任しといてくれ、銀座の座敷提供する。五十四人まで大丈夫や」、との力強い後ろ盾を得て、

「よし、閑古鳥鳴かんように」とばかり朝・毎・読を訪ねて無料広告を出し、名簿の三十人余の方々を総動員し、千里山の縁故からの応援もいただき、集まった申し込みが前回から二三〇%の七十五名、異例の二箇所の会場にし、開会と閉会だけ一緒にして、司会者として平謝りの開会になった。十八回生からは別室の会場、開会時の別室代表の咄嗟の挨拶に初対面の寺澤

美代子さんに頼み立派にしていただいてホットしたが、この度、会の代表に就いてもらうのも奇縁かも知れない。開会奏楽はジャズの日本の木管奏者の井上敬三様が「ふるさと」を吹いて始まったのも懐かしい。

戦前の在学卒業生だけの同窓会から一気に三十五回生まで拡がったこの復活第二回が、今日の千里山会の第二の旗揚げ進発の会だったように思えます。

第三回は更に増えてピアホールを借り、最初の合唱隊のお披露目と会場での会名の募集が行われ、早速基金募集、規約づくり、と会の永続性のための組織経営が飯島代表を中心にして進行し今日に繋がった訳です。

この間に測り知れない本会を愛する多くの同志が、この会を支えて来られ眞に感謝の念に堪えません。

この東京同窓会第三回には、先の福山氏は既に亡く、田中氏は退陣後長期療養の身となつて火付け役のお二人が総会にお姿が見られなくなったのは寂しいこと。会は右肩上がりに一路発展の道を歩み、翌九十七年に新会名「千里山会」の創立総会が発会し、今日の第十四回総会となりました。お二人よ、心安かれ！

さて冒頭に申しました別の二人の人(法人)のこと。

昭和十五年、太平洋戦争に入る前年ですが、郊外地の千里山のさらに奥地の環境抜群の地に私立千里山中学校ができました。当時ですから五年制です。昭和二十五年まで敗戦の年を真中に戦争に翻弄された十年間で惜しくも廃校に追い込まれました。きつと素晴らしい私立中・高校として残ったことでしょう。校舎は新制吹田一中となり、卒業生は今や本会の会員の多数を占めていると申しても過言ではないと存じます。

いま一つ千里山駅の下、グレース幼稚園へ行く途中にその名も美しい桜蘭高等女学校ができて、目を瞠ったものです。理想に燃えて好環境の便利なところに千中の向こうを張って創られたオーナーが居られたのでしよう。千里山会の十三回生から十五回生のOGに千二小からの進学者はなかったのですかと訊ねましたら皆無だったと言われ、吹田・大阪方面から電車に乗って来た生徒がいくらかは居たのでしょうか。千中・千高は千二からの多くの進学・卒業生とともに十年の歴史も明確なのに比べて、桜蘭はまるで謎と幻のような存在なのです。

廃校の後に千二小の分校になったとか、総会の席上、「分校に通った人、ちよつと手を挙げてください」

とお願いしたらその多さに吃驚しました。

ただ急増した組名の中に「桜組」「蘭組」がないのは千二の校長はじめ先生方の「永久欠番」の思いやりが働いたのでしょうか？と私勝手読みをしています。

寅年に因んで「虎は死んでも皮残す」

当時新校舎を建てる財力のある地方都市などありません。膨れ上がる千里山の児童人口の受け入れは、至難の業で、廃校になった二法人の校舎なしに戦後の千二の児童の教育は困難だったと思います。静かに消えて行かれた二人の人（法人）を思い、我々今日あることに思いを馳せることも時にあってよいと思うのです。豊津を出たら登山電車のようになり、変わらないホツとする空間、千里山駅を中心に1km四方は創刊号の故平一秀様の文にある「千里山という名の山」なのです。中学高校・大学同年の千一小出の友人が「よう東京でそんな会ができるなあ」と呆れてまるで魔性の山のように言うのもむべなるかな、再び高野辰之の「ふるさと」に返り、懐かしく仰ぎ見るものを持てる私達は幸いで、さらにお互い仕え合う群れであるとき、会はいつまでも発展を続けることを疑いません。

千二・千三の皆様、ご多幸をお祈りして終わります。